

見つめる目 しなやかな心 医療を支える 看護の手	看護部だより	2013 年 11 月号 第 271 号	特定医療法人衆済会 増子記念病院 看護部 部長 上村 志磨子 (認定看護管理者)
--------------------------------	---------------	----------------------------	--

主任を拝命して ～ キャリアアップとスキルアップを目指す ～

主任の仕事って、どんな仕事？

2階病棟主任 内山 裕子

私は H19 年 4 月に進学生として 3 階病棟へ配属されました。進学生のとときの私のプリセプターは、今の上司である釣谷課長でした。恵まれた環境の中、周りの先輩たちにはたくさんのことを教えていただきました。看護師の資格を習得してからは 2 階病棟へ配属となり、今に至ります。そして、今年の 6 月 11 日付で主任を拝命しました。「まさか、自分が・・・」という思いでしたが、周りの人たちに支えられながら毎日を過ごしています。まだまだ至らない点が多く、課題もたくさんありますが主任としての役割を果たせるよう努力していきますので、みなさんよろしくお願ひします。

1 主任の役割

主任の役割は多岐にわたりますが、位置づけとしては各部署のリーダー的存在であり、看護師長を補佐する立場にあります。他の部署から意見を聞いたり、病院の方針を伝えたり、ときには問題点を上司に伝えるなど、人と人をつなぐ役割を果たすこととなります。また、一般では「部署の副の立場で管理的役割を担う」「臨床で患者やスタッフとの関わりも多く、現場の状況を把握している」と受け止められています。

2 キャリアアップとスキルアップ

みなさん、役職に対してどんなイメージをお持ちでしょうか？「大変そう・・・」「忙しそう・・・」「責任が重い・・・」等々のイメージを持っているかと思ひます。看護師の世界では、一般企業ほどキャリアアップを重視する人は多くはなく、

自分の看護師としてのスキルアップをしたいと考える人が多いようです。

私自身、役職に就くなんて想像すらしていませんでした。正直なところ、役職者の働く姿をみて仕事量の多さや委員会への参加、そんな中でメンバーにも入り看護を提供する・・・忙しく走り回っている姿をみるとあまり魅力を感じる事ができませんでした。でも、役職には役職しかできない仕事もあります。今までとは違った視点で物事を見ることで、自分が本当にやりたい看護は？自分には何が足りなくて何が必要か？などいろんなことを考える機会となります。何より自分の成長に大きく繋がることを感じます。

これからも看護師として、個人のスキルアップのために努力を続けることも大事です。そして、もっと広い視野に立

ち、積極的にキャリアアップを目指す看護師が増えて欲しいと思いました。

3 主任を受けて 5 ヶ月目

主任は役職でありながら、現場で働く看護師に最も近い存在です。ですから、一スタッフとして同じように患者さんのケアにはいり、スタッフとともに看護を提供しています。

その他にも、課長が不在時には課長の代行を担い、急な勤務調整やベッドコントロールなどを行います。そのため、「管理」という仕事も知っておかなければなりません(これがまた大変なんです・・・)。

主任になって感じたことは、これまでと同じように仕事をしていては自分の仕事はできないということに気づきました。スタッフのときは、割と器用に業務をこなしている方だと思ったのですが、今では「自分は器用ではなかったんだ・・・」と落ち込んでいます。その結果が業務時間外での仕事となり、主任さんは「忙しそう・・・」「大変そう・・・」に繋がっていると考えました。実際にスタッフから「大変ですね。大丈夫ですか・・・」等の言葉をいただきます。

本当はこちら側が声をかけ、必要ならフォローをしなければならない立場ですが、まだまだそこには至っていないのが現状です。ですから時には、今までやっていた仕事を手放す勇気とスタッフへ任せることも必要だと感じました。そのためには、スタッフの協力は不可欠です。スタッフの理解と協力があって主任の業務が果たせると感じました。

今でも十分、協力をしていただきスタッフには感謝しています(迷惑かけますがこれからもよろしくお願いします)。となると・・・「人望がなくては務まらない」とも考えるようになりました。

よく聞くのは、主任のカラーで病棟の雰囲気が決まると言われています。自らが生き生きとした看護の実践者であることは、「歩く看護基準」としてスタッフみんなの役割モデルともなります。キャリアアップをすることで責任も大きくなってきますが、自分がやりたい看護を実践する近道にもなります。また、自分の思いを受け継ぐ自分の分身をつくれれば、質の維持や向上にもつながると思います。そして、自由な時間が増えることでスキルアップも同時に叶えることもできます。

4 おわりに

主任としての役割はまだ果たせていませんが、長い目で見守っててください。また、何かあればいつでも声をかけてください。その言葉を全力で受け止めます。そして「私は看護部長を目指したい」「役職の仕事は素敵だな」と思って頂けるように、頑張っていきたいと思っています。これから、たくさんの経験を積みながら「私は主任です」と自信をもって応えられるよう日々精進していきたいと思っています。

以上



学生コーナー

「コミュニケーションとは」

4 階病棟学生 桑畑 夏恵

名古屋に出てきて 2 年半が過ぎました。1 年目はまだ 4 年後のことを考えるなんて早いなと思いつつ毎日過ごしていました。気づけば今は 3 年目で学校では国家試験の対策が始まり、時間はたくさんあるようで限られていると感じます。その中で一番印象深いのは人とのコミュニケーションです。私は看護学校に入学するまでコミュニケーションが上手といえば楽しく会話ができることだと思いがちでした。

工作中、患者さまと楽しく会話をすることはありますが、たいていの患者さまは「〇〇が痛い」と痛みを訴えていたり、「いつから〇〇ができるの？」などと不安を訴えていたりします。なかには痛みや不安を訴えることはできても我慢をしている患者さまもいます。

それだけでなく、痛みや不安を訴えること自体が困難な患者さまもいます。以前の実習で、わたしは痛みや不安を訴えることが困難な患者さまを受け持ちました。患者さまを情報収集・分析をしていく中で、ある事実に基づいた情報だけを分析していたので内容が浅く、なかなか個別性を見いだした看護計画が立てられませんでした。患者さまは痛みや不安など何らかの思いを抱えています。それを言葉で表現する人もいればしない人もいますので、看護にはその思いをくみとることが大切だと思いました。

工作中は患者さまだけでなく、スタッフ間とのコミュニケーションも大切です。わたしは学校の「医療安全」という授業である病院で起こった医療事故の再現ビデオを見ました。そのあとグループに分かれて話し合いをしましたが、その事故はスタッフ間で確認や報告していれば起こらなかった内容で、その事故で患者さまは命を落としました。“いつもやっているから大丈夫”という考えが取り返しのつかない事故を引き起こすことに大変驚き、今でも印象に深く残っています。

病院は人命を扱っている場であるだけに、使い方を一歩誤れば大きな事故につながるものがたくさんあります。そのために、スタッフ間との情報共有がとても重要だと思いました。

コミュニケーションはただ楽しく会話ができることを「上手」というのではなく、会話をするなかで相手の気持ちを理解しお互いが信頼し合っていることをコミュニケーションが上手く取れているというのではないかと思います。患者さまにしてもスタッフ間にしても信頼関係はものすごく大切だとわたしは思います。そのためのコミュニケーション能力がわたしにはまだ足りません。もうすぐ次の実習も始まるので勉強できる時間がある学生の中に吸収できるものはたくさん吸収していきたいと思います。

以上



部署報告

3 階病棟

脳梗塞を発症し、失語症のある患者とのコミュニケーションの図り方

< 3 階病棟 >

仲亀沙穂 今井由佳 長谷川彩子

1 はじめに

左側頭葉に脳梗塞を発症し後遺症として右上肢麻痺、失語症、右側の失認が残った患者と、コミュニケーションを取るなかで様々な壁に当たった。突然言葉が思うように発せなくなった事で、訴えが伝わらなくなり、ストレスの増強や失望により感情失禁が多く見られるようになった患者に対し、看護師側も訴えが理解できず、お互いにジレンマを抱えていた。その中で、個別性を持った看護介入をする事により、コミュニケーションが少しでも図れる様になれば患者の喜びや自信に繋がると考え、今回のテーマを取り上げ、介入することとした。

2 患者紹介

A 様 70 歳代 女性

既往に関節リウマチがあり、リハビリ目的にて当院入院。○月○日左側頭葉に脳梗塞を発症。右上肢麻痺、失語症（ブローカー失語）、右側の失認が後遺症として残る。

3 手段

- ① ○月 12 日からコミュニケーションカードを作成し使用した。
- ② 翌月 7 日から単語を記載したうちわを使用した。
- ③ 毎日嚙下リハビリを行った。
- ④ 会話法 → (右ページへ)

1) 表に単語(うがい、トイレ、ハミガキ等)、裏に絵を描き、めくれるものにした。使用する前に、単語を提示し指を指して頂き言葉が理解できている事の確認を行った。

2) コミュニケーションカードでは、量が多く使用できなかった為、訴えの多かった単語のみ(うがい、リハビリ、痛い、トイレ、ありがとう、おはよう)とし、それを保持しやすいように持ち手が太めのうちわの表裏に記載した。

3) 当院で使用している嚙下訓練用のパンフレットを使用して行った。

月水金日は、昼食前に施行し「おはよう」のお発語を促し、火木土は昼食後に施行し「あいうえお」を促した。嚙下リハビリは現在でも使用している。

4) ゆっくりとした口調で出来るだけ短い文章で声かけをしていく事、「はい」「いいえ」で答えられる質問をしていく事、患者が何かを訴えようとしている際には、途中で遮らずに出来る限り傾聴した。意志疎通が図れた際には、喜びを共感することも意識した。

4 結果

コミュニケーションカードやうちわの使用は、トイレ時の緊急時には、カードの量が多く患者、看護師共に探している余裕がなかった為使用することが出来なかった。また、カードの量が多く看護師も探せなかった。うちわは、自己での保時が困難の為、終了とした。嚙下リハビリは、毎日行うことにより「おはよう」や「あいうえお」の発語がはっきりと出来るようになっていった。

看護師も会話法を意識していく事で、患者も発語しようとする姿や頷くなどの行動が見られるようになっていった。また、他患者ともコミュニケーションをとる姿が見られており、一緒に歌を歌う姿があった。歌を歌っている際には、普段できない「ららら」が発語できていた。脳梗塞発症直後には「ばー」のみの発語だったが、現在では促しにより「あいうえお」「おはよう」「ばいばい」「ぱっちり」「ちょっと」まで可能となった。

結果として、発語出来る言葉が増えたが、ジェスチャーによる訴えが多く積極的なものはみられなかった。

5 考察

失語症患者は、それまでの言葉によるコミュニケーションの世界から隔離されると大きな不安と苛立ちの状態となる。そのような状況に対し毛束真知子は、不安と苛立ちの状態に共感し「一緒にコミュニケーションを作り上げていきましょう」という意思を確認することが基本姿勢であると述べている。

実際に、患者と関わっていく上でゆっくりと「はい」「いいえ」で答えられる様に質問をする事で「ばーばー」と発言しながら首を振ったりして、コミュニケーションがとれるようになっていった。思いが伝わった際には喜びを共感する事により、患者も手を上げて喜び、笑顔が増えていった。また、看護師の関わりをきっかけに他患者とのコミュニケーションがとれ、会話などを楽しむ姿がありストレス軽減に繋がったと考える。患者は、成功体験を積み重ねていく事で、コミュニケーションに対する前向きな姿勢を作ることができ、笑顔も増えてコミュニケーションを積極的に取れるようになったと考える。

また、毛束真知子は、失語症の患者に対するリハビリ方法として、毎日リハビリを行うこ

とで出来ることが増え、脳の活性化をもたらす自然治癒の促進と代謝機能の開発を促していく事となり、練習を積み重ねることによって、患者の練習への忍耐力が向上し、障害の状態が明らかになっていくと述べている。こうした事から、嚥下リハビリを毎日行うことで発語に対する意識付けが出来て、言葉も増えていったのではないかと考える。

久保健彦はブローカ失語症の患者には、絵・写真・短い単語を記載した単語カードを使用する事で、理解しやすくコミュニケーションがとりやすくなると述べている。しかし、今回の事例では、単語の数が多すぎた事や、右側に失認がある為、左側ばかりに意識が集中してしまい、両方で見なければいけないコミュニケーションカードは有効ではなかったと考える。

6 おわりに

今回、失語症を発症した患者とコミュニケーションを図る上で、ゆっくりと傾聴する事の大切さや継続的な関わりの必要さを改めて実感する事ができた。

また、コミュニケーションカードの使用の様子が文献には良いと挙げられていても、症状は一通りではない為、患者にあった援助方法を考えていくことの必要性を実感した。

コミュニケーションは言葉だけではなく、表情やジェスチャーでも取る事ができる。必要なのは「相手が何を伝えたいのか」を想像し考えを読み取ろうとする努力や思いやりの姿勢であるという事がわかった。

今回の取り組みをして結果としては、ジェスチャーが多かったが患者がストレスなく入院生活を過ごすことが出来た事は、一定の評価を得る事が出来た。今回の取り組みを個別性の看護の大切さや、患者と向き合い看護をする事の楽しさを実感する事ができた

め、今後は患者にあった援助方法を考え継続的な看護を行っていきけるよう意識していきたい。

<引用 参考文献>

- 毛束真知子著; 絵でわかる言語障害、学習研究者、2002
久保健彦著; 言語聴覚シリーズ16、健者、2000

前号(270号)の感想

手術室

「看護部だより」もずいぶん年月を重ね、多くの方々のそれぞれの思いが掲載されてきました。

皆さん方、各々読みどころがあると思います。看板はやはり一面記事でしょうか。部署報告、学生さんの一言といろいろあります。文章というのはその人の人となりができるものです。この文の中にどういう思いを込めたいか、こう書くことで相手にはどのように伝わるのかそういった楽しみ方もあります。

さて前号からですが、学生コーナーはどの号でもそうなのですが、まだまだできない自分との葛藤が書かれていました。でも大丈夫です。人間というものは日々、目には見えませんが少しずつ成長しているのです。

出来なかったことがある日気がつくと飛び越えられていたということがあります。かくいう私も小学生のころ、先生が心配して声をかけて下さるほど無口でした。しかし、特に女性は年を重ねると変わります。子供を持つと見事に変わります。おばちゃんになると素晴らしく変わります。

小さい一歩でも毎日が大事。一緒に歩いていきましょう。

前々(269号)の感想

「初心に戻って」

学生のコーナーを読んで、学生の皆さんが仕事と学業の両立の大変な中で、大きく成長している事に感動し、同時に自分も患者さんによりそった看護や共感することの大切さ、看護と言う仕事に対してのやりがいを、実習や先輩から学んだ事を思い出しました。

日々の忙しい業務に追われ忘れそうになっていた事を改めて感じる事が出来ました。これからも初心を忘れず思いやりを持ち、患者のQOL向上につなげることが出来る看護を行っていきたいと思いました。

以上

3階病棟 久堀 今井由

